

公演として唄われる神歌

沖縄・伊良部島佐良浜の事例

Songs to Gods or Goddess Performed Officially
-A Case of Sarahama, Irabu-Island of Okinawa-

川上新二

Shinji KAWAKMI

Abstract

Priests who perform rituals for community are called Tukanma in Sarahama, Irabu-island of Okinawa. Even among Tukanmas, those who offer songs to gods or goddess are called Kakaranma. Tukanma (Kakaranma) usually are chosen by drawing lots from married women who live in Sarahama. But, since that women have become to refuse to take the Tukanma (Kakaranma) in recent years, and the position of Tukanma (Kakaranma) becomes vacant at present, so songs offered to gods or goddess have not been passed down to the next generation. On the other hand, the women who once took the Kakaranma have become to sing those songs officially in public places recently. Sikkim-Kuts, the traditional ritual performed by priests, has been performed officially in Chindo-island, Korea, too. Comparing with the case of Sikkim-Kuts, Chindo-island in Korea, this article is about to study Kakaranma's songs performed officially in public places.

Keywords：沖縄・伊良部島佐良浜、ツカサンマ、カカランマ、カミウタ（神歌）、公演

1. はじめに

周知のように、沖縄本島および先島諸島で活動する代表的な民間宗教職能者には、ノロもしくはツカサなどとよばれる女性宗教者と、ユタもしくはカンカカリヤなどとよばれる女性宗教者がいる。前者は地域の神を祀る聖地であるウタキ（御嶽）で行なわれる、いわば公的な祭事を担当するのに対して、後者は占いなど個人的な依頼事に応じる宗教者である。

伊良部島佐良浜で公的祭事を担当する女性宗教者はツカサンマとよばれ、6名で構成される¹。内訳はウンマ（ウフンマともよばれる）2名、カカランマ2名、ナカンマ2名である。位としてはウンマが一番上であるが、カカランマは祭事で神に捧げる歌を唄うので、最も重要な役割を果たすとされる。カカランマが祭事で唄う歌には、カミウタ（神歌）とよばれるもの11曲と、オヨシとよばれるもの12曲がある。このうちオヨシは一般人には聞かせないものである。ナカンマはウンマを補佐する。

ツカサンマは、近年では島外から嫁入りした女性も含めて、佐良浜に住む47歳から57歳までの女性のなかからクジで選ばれる。任期は3年である。佐良浜という名称は通称として使わ

れている地名であり、行政区域としては池間添と前里添という2つの地区に分かれている。ツカサンマを選ぶ際には池間添と前里添の区長がおのおの関係者を招集して、それぞれウンマ1名、カカランマ1名、ナカンマ1名の計3名ずつをクジで選ぶことになっている。

佐良浜では、ツカサンマが担当する祭事が年間60回くらいあり、祭事を務める負担から近年、人々はツカサンマになることを嫌がるようになった。クジで選ばれても就任を拒否するようになり、とりわけカカランマに就くことは、カミウタ（神歌）やオヨシを覚えなければならないため、嫌がられる。現在、カカランマも含めてツカサンマに就いている女性はいない。

平成24年に翌年からツカサンマを務める者を選ぶことにしていたが、選ばれた人が引き受けることを承知しなかったため、それ以降ツカサンマが不在となっている。平成26年に、前回選ばれた者の任期3年のうちの残り1年を引き継ぐかたちでツカサンマが選ばれた。しかし、任期1年ではカカランマとなった者がカミウタ（神歌）やオヨシを覚えることは困難であろうとして、歌の継承は期待されなかった²。

平成28年の旧正月に新しいツカサンマを選ぶ予定であった

¹ 一方、佐良浜では、占いなど個人的な依頼事に応じる女性宗教者はムヌンマとよばれる。

² 伊良部島佐良浜の社会組織や民間宗教職能者の概要については、拙稿〔川上2016〕参照。

が、実施できなかった。前述のようにツカサンマを選ぶにあたっては、池間添と前里添のそれぞれの区長が関係者を招集してクジが行なわれるが、現在、事情があって2つの地区のうち一方の区長も空席の状態であり、まずはその区長を選ばなければならないのが現況である。このようなわけで現在ツカサンマは不在であり、ツカサンマがいなければ佐良浜での年間の公的祭事も行なわれない。公的祭事が行なわれなければカミウタ（神歌）やオヨシが唄われることはなく、新しいカカランマが選ばれなければカミウタ（神歌）やオヨシを次世代へ継承することも中断される。

その一方で、近年、カカランマを務めた経験のある3人がカミウタ（神歌）やオヨシを公演などの場で唄って観衆に披露することも行なわれるようになってきている。カカランマを含むツカサンマの新たな選出が中断しているため、祭事で唄われていたカミウタ（神歌）やオヨシが、今後、公演の場で唄われるものとして存在してゆくようになる可能性も考えられる状況である。

民間の宗教職能者によって実施されてきた儀礼が公演としても行なわれるようになった事例は、韓国でもみることができる。筆者は拙稿〔川上 2017〕において、韓国の全羅南道珍島で伝承されてきた、死者をあの世に送る儀礼であるシッキム・クツととりあげ、無形文化財に指定され公演として行なわれるシッキム・クツと、地域住民からの依頼によって行なわれるシッキム・クツとを、継承者およびシッキム・クツが行なわれる際の霊的存在の顕現に焦点を当てて比較したことがある。

本稿は、拙稿で考察した、無形文化財に指定され公演としても行なわれるようになった韓国・珍島のシッキム・クツの事例と比較しながら、公演として唄われるようになってきているカカランマたちのカミウタ（神歌）やオヨシについて、若干の考察を加えるものである。

2. カカランマとカミウタ（神歌）、オヨシ

まず、現在カミウタ（神歌）やオヨシを公演として唄っているカカランマを務めた経験のある3人、Y、U、Nから聞いた話をもとに、彼女たちと歌とのかかわりについて紹介する。

3人のうちYは平成13年から15年まで、UとNは平成16年から18年まで、それぞれカカランマを務めた。Yがカカランマに選ばれる前の2年半の間、このときもツカサンマが選ばれず不在のままであった。人々の間にツカサンマを求める声があり、Yたちが選ばれた。Yの次の世代のツカサンマとしてUやNたちが選ばれ、U、Nの次には2回ツカサンマが選ばれ（平

成19年～21年および平成22年～24年のツカサンマ）、その後には選ばれていない³。

最近、人々は選ばれてもツカサンマに就くことを拒むようになってきているが、ツカサンマに就くことを断ると、その者に悪いことが起こるといわれている。悪いことには大きいこと、小さいことの違いもあり、また、悪いことがあっても他人にはいわないであろうから、本当に悪いことが起こったかどうか他人にはわからないが、おそらく起こっているであろう。

カミウタ（神歌）やオヨシは録音されたテープを聴いて一人で練習することもできるが、何人かと一緒に唄う方が、リズムのとり方、声の合わせ方などの練習ができてよい。Yたちもカカランマを務めた先輩が唄う歌を録音したテープを聴いて練習した。その際、自分が練習で唄う歌は他人に聴かれてもかまわないが、先輩が唄う歌を録音したテープは人に聴かれてはいけなるといわれた。

3人はカミウタ（神歌）やオヨシの歌詞を記したノートを各自持っているが、歌詞をノートに記すようになったのはYの代からである。Yより先代のカカランマたちもノートに記していたが、簡単に記していただけであった。Yの代からは、カミウタ（神歌）やオヨシ、さまざまな祝いの歌⁴、祭事で使う物やその使い方などをノートに詳しく記しておくようにした。UやNは、先輩カカランマのノートに書かれた歌詞を自分のノートに書き写した。書き写した後に先輩にノートを返したが、Uは歌をすべて書き写すのに3年かかった。

オヨシは一般人には聞かせない歌であるが、しかし正月に大主御嶽で行なわれるニガイ（年の初めの願い）では、各家から一軒ずつ人びとが供物を載せた膳をもってきてニガイ（願い）に参加するので、カカランマが唄うオヨシを一般の人も聞くことができる。大主御嶽はナナムイやウパルズともよばれ、佐良浜で最も大きなウタキ（御嶽）である。大主御嶽で行なう年初めのニガイ（願い）では一般人もオヨシを聞くことができる一方、以前は、大主御嶽でのニガイ（願い）で唄われるオヨシを録音することや、ニガイ（願い）の様子を写真撮影することは禁じられていた。なお、現在はツカサンマが不在であるため、大主御嶽でのニガイ（願い）は行なわれておらず、また、大主御嶽の掃除はツカサンマがするが、それも行なわれていないままである。

Yたちは、現在カカランマが選ばれていないため、カミウタ（神歌）やオヨシの伝承が途絶えてしまうのではないかとという危機感をもっている。新しいカカランマが長い間選ばれないまま自分たちが歳をとってしまうと、現在自分たちが覚えている

³ 平成25年から3年間務めるはずであった者たちの任期の残り1年を引き継ぐかたちで平成26年に選ばれた者たちは除かれている。

⁴ 祭事に唄われる歌として、カミウタ（神歌）やオヨシのほか

に新築、米寿、古希、子供の誕生などのときに唄う祝いの歌もある。これらの歌は祝いの席で、当人たちの健康等を神に祈って唄われるので、その席に参加している一般の人々も聞くことができ、聞き覚えた人は唄うことができる〔川上 2016:20〕。

公演として唄われる神歌

歌も教えられなくなってしまうかもしれず、また、3人の後に選ばれたカカランマたち(平成19年～21年および平成22年～24年にカカランマを務めた者たち)も歌を知っているが、後輩たちに教えないでいると、彼女たちも歌を忘れてしまう可能性がある。歌を教えることによって、自分たちも歌を覚えていられるのである。

カカランマを引退した3人、Y、U、Nが公演としてカミウタ(神歌)やオヨシを唄うようになった理由は、彼女たちによれば、歌の継承すなわち古くから伝えられてきた自分たちの文化の継承が途絶えてしまうのではないかという危機感と、これからの時代、島を離れて暮らしている佐良浜の人々にも歌を聞かせてよいのではないかという思いからであったという〔公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団 2014:4-5〕。

筆者の手元にあるパンフレットから、彼女たちの公演の例をあげるならば、平成21年7月第25回東京の夏音楽祭「日本文化の古層・宮古島の神歌と古謡」(草月ホール)、平成22年12月「宮古島の神歌と古謡」(法政大学薩埵ホール)、平成24年7月第1回東京無形文化祭「祈る」宮古島の神歌と古謡(紀尾井ホール小ホール)があり、また平成23年にはドキュメンタリー映画「スケッチ・オブ・ミヤーク」(監督・大西功一)に出演している。さらには、平成25年11月「人類の原初的文化的表象—アジアのシャーマン遺産—」(韓国・珍島郡無形文化財伝修館)、平成26年11月「アジア・太平洋地域の芸能 宮古の神歌と韓国・シッキムクツ」(国立劇場おきなわ)でも公演している。

韓国と国立劇場おきなわでの公演を除いて、他はすべて音楽プロデューサーK氏が監修等をしている。Yによれば、古謡を求めに宮古島にきていたK氏が佐良浜にもやってきて、YやYの先輩カカランマたちに唄い方や次の世代のカカランマへの歌の伝え方を教えてくれるように求めたという。Yたちは、カカランマを務めた先代の人たちから歌詞やリズムなどを聞いて覚えたと教えた。カカランマたちの歌にK氏が音楽をつけたCDも発売された。これがきっかけでYは、これからの時代、島を離れている人々にも聞いてもらうため、カミウタ(神歌)やオヨシを佐良浜から外に持ち出して人々に聞かせてもよいのではないかと考えるようになった。Yたちよりも先代のツカサンマを務めた人のなかには、歌を佐良浜の外に持ち出して人々に聞かせることに反対する人もいたというが、K氏の取材を契機として、Yたち3人はカミウタ(神歌)やオヨシを公演として唄うようになったとみられる。

3. 継承者の問題

カカランマを務めた経験のあるY、U、Nの3人が、公演としてカミウタ(神歌)やオヨシを唄うようになった経緯を紹介した。次世代のカカランマが選ばれていない現状では、佐良浜

の祭事で唄われる歌として伝えられてきたカミウタ(神歌)やオヨシが、公演として唄われるものとして存在していくようになる可能性もある。

筆者は拙稿〔川上 2017〕で、佐良浜のカミウタ(神歌)やオヨシの場合と同様に、民間宗教職能者によって伝えられてきた儀礼が公演としても行なわれるようになった韓国・珍島のシッキム・クツをとりあげ、無形文化財に指定され公演されるようになったシッキム・クツには、継承者および霊的存在の顕現に関して、地域住民からの依頼によって伝統的に行なわれてきたシッキム・クツとは異なる変化が生じていることを指摘した。そしてシッキム・クツを宗教文化の一つとみるならば、シッキム・クツも文化を構成する5つの要素、すなわち物質、技術、社会関係、価値、言語の5つの要素から構成されていると考えられるが、継承者に関して変化が生じているということは社会関係の側面で、霊的存在の顕現に関して変化が生じているということについては価値の側面で、それぞれシッキム・クツに変化が生じていることを示すものであると考えられる旨考察した。

カカランマが伝えてきたカミウタ(神歌)やオヨシが公演として唄われるようになる場合にも、継承者の問題や霊的存在の顕現について、祭事で唄われる場合と比べて異なる点が生じるであろうか。以下、珍島のシッキム・クツの場合と比較しながら、これらの点について検討する。

まずは継承者について検討する。

(1) 韓国・珍島のシッキム・クツの場合

韓国・珍島のシッキム・クツは、死者の魂を象徴的に洗ってあの世に送る儀礼であり、歌舞や楽器の演奏によって実施される。シッキム・クツの実施を継承してきたのは、世襲によって歌舞や楽器演奏の技能を継承してきたタンゴルとよばれる人々であり、タンゴルは世襲巫ともよばれている。珍島にはタンゴルの家系がいくつかあり、その家系に生まれた女性がシッキム・クツで実施する歌舞を継承し、男性は楽器演奏の技能を継承してきた。

シッキム・クツが1980年に国から無形文化財に指定された後、シッキム・クツを行なう技能を継承する者の育成が求められ、珍島郡無形文化財伝修館という名称の施設でシッキム・クツの教習が行なわれるようになった。そして、この教習で技能を身につけた者が、シッキム・クツを公演するメンバーになっている。

ところで、その施設での教習には、楽器の演奏を担当するタンゴル家系出身の男性は参加しているが、歌舞を担当するタンゴル家系出身の女性は参加していないという。シッキム・クツはタンゴルによって実施されてきたが、その一方で、タンゴルは朝鮮王朝時代には賤民とされ、現代に至るまで一般民衆から差別されてきた。そのため現在でもタンゴルになることを避け、

タンゴルの家系出身ということのを隠して他の職を探す者は多いという〔安田 1994,1997〕。タンゴル家系出身の女性がシッキム・クツの教習に参加していないのは、そのようなこととも関係があるのではなからうかと考えられる。

タンゴル家系出身の女性に代わってシッキム・クツの教習に参加しているのは、珍島で世襲巫ともよばれるタンゴルのほかに、もう一種類の巫女として活動している女性たちである。それは歌舞や楽器演奏の技能を継承する家系の者ではなく、ある日突然、神霊に憑依され、それを守護霊として占いなどをするようになった人々である。そのような者はチョムジェンイやパサルなどとよばれており、また降神巫ともよばれている⁵。

珍島の住民は従来、家庭に何か問題が生じた場合、先ず降神巫チョムジェンイにその原因を占ってもらい、その判断にしたがって、問題を解決するために世襲巫タンゴルにシッキム・クツをはじめとする各種儀礼の実施を依頼してきた⁶。このように珍島の降神巫チョムジェンイは占いだけを行ない、歌舞によって行なわれるシッキム・クツなどの儀礼を実施するのは世襲巫タンゴルであった⁷。しかし1970年代ころからシッキム・クツなどの儀礼を自ら実施する降神巫チョムジェンイも現れるようになり、珍島の人々も世襲巫タンゴルだけでなく、降神巫チョムジェンイにも儀礼を依頼するようになってきている〔崔吉城 1969:208;金泰坤 1981:445-446;伊藤 1996:284〕。

自らシッキム・クツなどの儀礼も行なうようになった降神巫チョムジェンイであるが、彼女たちは世襲巫タンゴルのように家系として歌舞を継承してきた者ではない。そのため、世襲巫タンゴルが行なっているものを見よう見真似で覚えてシッキム・クツを行なっており、タンゴルや研究者などからは歌舞の拙さが指摘されてきた〔川上 2011:98-104〕。

自らシッキム・クツを行なうようになった降神巫チョムジェンイのうちの数人が、珍島郡無形文化財伝修館でのシッキム・クツの教習に参加している。その理由として彼女たちは、「故郷である珍島式のシッキム・クツを身につけたい」、「伝統文化、芸術としてのシッキム・クツを身につけたい」などと語っており、故郷の伝統文化を身につけて、歌舞の拙さを克服したいという思いがあるようである。

このように、伝統的にシッキム・クツを継承してきた世襲巫タンゴル家系出身の女性が教習に参加しておらず、降神巫チョムジェンイが参加している現状では、将来、公演として行なわ

れる無形文化財シッキム・クツで歌舞を担当するのは世襲巫タンゴル家系出身の者ではなく、降神巫チョムジェンイ出身の者となる可能性が考えられる。実際に、例えば2014年11月に国立おきなわ劇場で行なわれた同劇場開場10周年記念特別公演では、シッキム・クツの教習を受けている人々が珍島から招かれてシッキム・クツが演じられたが、そのときに歌舞の主要な役割を担当したのも降神巫チョムジェンイ出身の女性であった〔公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団 2014〕。

シッキム・クツは世襲巫タンゴルによって継承されてきたものであるが、先述したように降神巫チョムジェンイも住民から依頼されてシッキム・クツを行なうようになってきている。それに加えて無形文化財として公演されるシッキム・クツにおいても、降神巫チョムジェンイがその歌舞の継承者となっていく可能性が考えられる状況である〔川上 2017〕。

(2) カカランマが唄うカミウタ (神歌)、オヨシの場合

無形文化財に指定され、公演として行なわれるようになった珍島のシッキム・クツの場合、その歌舞の継承者が伝統的にシッキム・クツを伝えてきた者とは変わっていく可能性があることを指摘した。カカランマが唄うカミウタ (神歌) やオヨシの場合は如何であろうか。

現在、公演でカミウタ (神歌) やオヨシを唄っているのは、カカランマを務めた経験のある3人である。3人は、新しいカカランマが選ばれずに、歌が伝わらなくなることを心配しており、新しいカカランマが選ばれて、その者に歌が伝えられることを希望している。したがって現状では、公演としてカミウタ (神歌) やオヨシを唄っている彼女たちも、カカランマ以外の者に歌が継承されることは考えていないようである。カミウタ (神歌) やオヨシはカカランマにのみ伝えられ、佐良浜の公的な祭事で唄われてきたものである。カカランマを務めた経験のある3人によって、それらの歌が公演で唄われているとしても、現段階ではカカランマもしくはカカランマの経験者以外の者がカミウタ (神歌) やオヨシを唄うようにはなっていない。

ところで今後、カミウタ (神歌) やオヨシの継承者がカカランマ以外の者になる可能性があるとするならば、例えば、カミウタ (神歌) やオヨシが無形文化財に指定され、保護や保存、公開が求められるようになった場合が考えられる。地方自治体からであれ国からであれ、ある民俗事象が無形文化財に指定さ

⁵ 珍島の降神巫については拙著〔川上 2011〕参照。

⁶ クツとは、タンゴルの歌舞と楽器演奏によって行なわれる儀礼をいう。シッキム・クツの他に、家の守護神を祀ったり、家庭の安寧を祈ったりするクツもある。

⁷ 世襲巫タンゴルたちは、現在ではそのような仕組みは崩壊してしまっているが、かつては日本の仏教寺院の檀家制度のように、それぞれ独占的にシッキム・クツなどの儀礼を執行する権利をもつ家々を有していた。このような点でタンゴルは、ある

程度地域社会と制度的な関係を有する宗教者であったと考えられる。他方、降神巫チョムジェンイは、独占的に占いを実施できる家々をもつてはいない。占いの依頼が多いか少ないか、流行るか流行らないかは、住民からの信頼度による。以上のようなことから、宗教者の性格として、地域社会と制度的な関係をもっていたタンゴルは、佐良浜で公的祭祀を担当するツカサンマに、個人的な依頼に応じて占いを行なうチョムジェンイは佐良浜でのムヌスンマにそれぞれ対応するとも考えられる。

公演として唄われる神歌

れるようになると、保存会などが作られて保存事業が実施され、伝承者の育成、現地公開、記録作成が課せられるという。そして、そのような過程で、その民俗事象にさまざまな面で変化が起こることが指摘されている〔鈴木 2014,2015〕。既述のように韓国・珍島のシッキム・クツの場合も、無形文化財に指定されて継承者の育成のために教習がはじめられたことによって、無形文化財としてのシッキム・クツにおいて歌舞を実演する者が、伝統的にシッキム・クツを伝えてきた世襲巫タンゴルではなく、降神巫チョムジェンイに変わっていく可能性が生じている。

カミウタ（神歌）やオヨシが無形文化財に指定され、継承者の育成が課せられるような状況が生じた場合、ツカサンマやカカランマの選出とは別に、無形文化財の継承者の育成が行なわれ、育成された者が公演として歌を唄うということが起こるかもしれない。珍島のシッキム・クツを伝統的に実施してきた世襲巫タンゴルではない降神巫チョムジェンイがシッキム・クツの教習に参加している動機は、故郷の伝統文化としてのシッキム・クツを身につけ、歌舞の拙さを克服したいという思いからのものであるが、そこには無形文化財の保有者になりたいという希望もあるかもしれない。カミウタ（神歌）やオヨシの場合も、それが無形文化財に指定された場合、無形文化財の保有者になりたいという者が自ら名乗り出てくることもあるかもしれない。

4. 霊的存在の顕現の問題

次に、儀礼の際の霊的存在の顕現について検討する。宗教は、しばしば霊的存在（超自然的存在、超人間的存在）とのかかわりから論じられることがある〔佐々木 1995:20-21〕。死者をあの世に送るために行なわれるシッキム・クツや、祭事で神々に捧げるために唄われるカミウタ（神歌）、オヨシも、宗教文化の範疇に入れることができるならば、霊的存在とのかかわりに注目することも、研究の視点の一つになると思われる。

(1) 韓国・珍島のシッキム・クツの場合

珍島の住民からの依頼によって依頼者の家でシッキム・クツが行なわれる場合、シッキム・クツの対象（あの世に送る対象）とされる死者がシッキム・クツの依頼者に憑依することがある。土佐は、シッキム・クツの依頼者がクツの最中に、あの世に送る対象とされた死者に憑依された事例を紹介している。そこでは、死亡した夫のためにシッキム・クツの実施を世襲巫タンゴルに依頼した未亡人が、クツの最中に亡夫に憑依されて踊ったり、クツに集まった人々と酒や会話のやり取りをしたりして騒動を起こし、ついにはタンゴルやクツに集まった人々から、静かにするように咎められたという出来事が報告されている〔土佐 1989:386〕。土佐は、このような依頼者への死者の憑依は頻

繁に起こる現象ではないが、しかしそれは、亡夫に憑依された未亡人の特異な性格や偶然に由来する異常な出来事ではなく、一定の伝統的観念を共有する集団の内部での自然的な展開であったと指摘している〔土佐 1989:375-392〕。筆者も降神巫チョムジェンイが行なったシッキム・クツではあるが、シッキム・クツの最中に、あの世に送る対象とされた死者がクツの依頼者に憑依した事例を観察したことがある〔川上 2011:83-97〕。

このように人々からの依頼によって行なわれるシッキム・クツでは、死者がクツの依頼者に憑依することがあるのに対して、公演として行なわれるシッキム・クツでは、公演の最中に死者が公演を観覧している誰かに憑依することはないと考えられる。もともと公演として行なわれるシッキム・クツは、誰か特定の死者のために行なわれるものではないため、観客の誰かに死者が憑依するという自体、考えにくいことではある。実際、公演としてシッキム・クツが行なわれる場合、クツの進行のなかで死者が生者の誰かに憑依する場面、すなわち霊的存在が顕現する場面はみられない。

このことは、公演として行なわれるシッキム・クツは、珍島の人々が共有する死者が生者に憑依するという観念を受け継いでいないということになるのではなかろうか。言い換えるならば、シッキム・クツを公演として行なうことによって、珍島の人々が共有してきた霊的存在の顕現という観念を人々の間から脱落させていくことになるのではなかろうかと考えられる〔川上 2017〕。

(2) カカランマが唄うカミウタ（神歌）やオヨシの場合

珍島のシッキム・クツでは、人々からの依頼で行なわれる場合には霊的存在の顕現が見られることがあるのに対して、公演として行なわれる場合には霊的存在の顕現が見られないため、公演として行なわれるシッキム・クツは珍島の人々が共有してきた観念の一つを受け継いでいないと考えられることを紹介した。佐良浜のカカランマたちの場合は如何であろうか。

カカランマたちも、祭事でカミウタ（神歌）やオヨシを唄うとき、霊的体験をするという。カカランマを務めた経験もち、現在カミウタ（神歌）やオヨシを公演で唄っている3人の話を紹介すると、次のようである。

ツカサンマ（カカランマ）たちが大主御嶽（ナナムイ）で拝んでいると、ツカサンマ（カカランマ）のなかでも靈感のある人は神の気配を感じる。大主御嶽以外のニガイ（願い）をする場所（ウタキ、御嶽）でも、神の気配を感じたり、神の姿を見たりする。例えば、ウジャキニーというウタキ（御嶽）でニガイ（願い）をしている最中に見た神は美人であった。佐良浜にはいくつかのウタキ（御嶽）があるが、ウタキ（御嶽）ごとに異なる神の気配を感じる。その気配によって、

拝むツカサンマ（カカランマ）の様子も変わってくる。ウタキ（御嶽）の神ごとに性格があり、その神の性格がツカサンマ（カカランマ）にも反映するためである。例えば、ウイラ（ウイラニー）というウタキ（御嶽）では静かに歌を唄い、ウジャキニーのウタキ（御嶽）では賑やかに唄う。

オヨシは大主御嶽（ナナムイ）、ウジャキニー、ウンマ（ウフンマ）の家など、唄うべき場所で唄う。それぞれのウタキ（御嶽）でオヨシを唄うと、そのウタキ（御嶽）の神が降りてくる。降りてきてカカランマと一緒に唄う。自分たちがオヨシを唄っていると、自分たちのほかに唄っている声が聞えてくるので、聞えてくる方を見たりもする。また、唄っている自分の声が変わることもある。自分の声ではないので、自分でもびっくりする。神の声で唄っている。このようなことは舞台公演でオヨシを唄うときには起こらない。ウタキ（御嶽）で唄っているときには、自分の声ではないので、自分が出す声に自分でびっくりする。

このようにカカランマたちは、ウタキ（御嶽）でニガイ（願い）をするときには、神の気配を感じたり、神の姿を見たり、神が唄う声が聞えたりするという。このような状況は、佐々木のいう霊感型の憑依に該当するといえるであろう〔佐々木 1980:42-62〕。またカカランマたちは、オヨシを唄っていると、自分の声ではなくなり、神の声で唄っていることに気づいてびっくりすることがあるともいう。このような状況は、佐々木のいう憑入型の憑依に該当するとも考えられ〔佐々木 1980:42-62〕、また、カカランマたちは神の声で唄っている自分に気づいているので、佐藤の指摘を借りれば〔佐藤 2000〕、霊感型と憑入型の複合型の憑依とも考えられる⁸。

カカランマたちもウタキ（御嶽）での祭事でオヨシを唄う際には、霊感型の憑依や、霊感型と憑入型の複合型の憑依を経験するのである。しかしながらカカランマを務めた経験のある3人もいうように、公演でオヨシを唄うときには、このような憑依は起こらないようである。であるならば、珍島のシッキム・クツの場合と同じく、カカランマによるオヨシの公演は憑依が脱落したものであるといえるであろう。

ただし、珍島のシッキム・クツでは死者がシッキム・クツの依頼者に憑依するのであり、第三者から見て依頼者への死者の憑依が明らかに見てとれる、まさに霊的存在の顕現といえるものであるが、これに対してカカランマがオヨシを唄う際に生じる憑依は、カカランマたち自身が経験するものであり、またオヨシは基本的には一般人には聞かせないものである。そのため祭りの場でのカカランマたちへの憑依は、第三者が実見でき

るものではなく、憑依とはいえても、霊的存在の顕現とまではいえるものではないかもしれない。祭りの場において第三者が実見できないものであるならば、公演においてオヨシを唄っているカカランマたちが霊的存在を感じているか、目にしているか、声を聞いているかは、観客にとって関心事項となることはないであろう。

このような点から、珍島のシッキム・クツの公演が珍島の人々が共有してきた霊的存在の顕現という観念を人々から脱落させてゆくことになると考えられるのに対して、カカランマが唄うカミウタ（神歌）やオヨシの場合には、祭りの場でも第三者がカカランマへの霊的存在の顕現（霊感型憑依と称した方が適切かもしれない）を実見することはないため、公演においてカカランマに霊感型憑依が生じないとしても、それを観る人々から霊感型憑依の観念を脱落させてゆくことになるという問題は生じないと思われる。

5. おわりに

本稿では、佐良浜の公的祭事を担当してきたツカサンマの新たな選出が困難になっている近年、カカランマを務めた経験のある3人が、祭りで唄うカミウタ（神歌）やオヨシを公演として唄っている状況が生まれていること、すなわち継承されてきた民間の宗教文化が公演として行なわれるようになっていくことについて、韓国・珍島のシッキム・クツの場合と比べながら検討した。その際、筆者が拙稿〔川上 2017〕で考察した継承者と霊的存在の顕現の問題に焦点を当てて考察した。

韓国・珍島のシッキム・クツでは、無形文化財として公演されるシッキム・クツの歌舞の継承者が、伝統的にシッキム・クツを伝えてきた世襲巫タンゴルではなく、降神巫チョムジェンイに変化していく可能性がある。一方、佐良浜のカカランマが唄うカミウタ（神歌）やオヨシの場合は、現段階では、カカランマもしくはカカランマを務めた経験がある者以外の者がそれを唄う状況は発生していないことを指摘した。すなわち、佐良浜のカミウタ（神歌）やオヨシの場合には、継承者に未だ新たな変化は生じていないといえる。

また、珍島のシッキム・クツでは、地域住民からの依頼で行なわれるシッキム・クツでは、シッキム・クツの依頼者がシッキム・クツによってあの世に送られる対象である死者に憑依されるという現象、すなわち霊的存在の顕現が起こることにも対して、公演として行なわれるシッキム・クツにはそのような霊的存在の顕現は起こらない。カカランマの場合にも、公的な祭りに対してウタキ（御嶽）でオヨシを唄う際には、カカランマたちに霊感型憑依が生じる一方、公演でそれらを唄うと

⁸ なお、珍島のシッキム・クツで生じる依頼者への死者の憑依

は、憑入型の憑依と考えられる。

公演として唄われる神歌

きには靈感型憑依は起こらない。公演においては霊的存在の顕現もしくは靈感型憑依は起こらないのは、珍島のシッキム・クツの場合も佐良浜のオヨシの場合も同様である。

ただし珍島のシッキム・クツの場合、人々からの依頼で行なわれるシッキム・クツでは霊的存在の顕現ともいえる、第三者が確認できる明らかな憑依現象が生じることもあるが、公演としてのシッキム・クツでは霊的存在の顕現が生じないところから、公演されるシッキム・クツは珍島の人々が伝えてきた霊的存在の顕現という観念を人々から脱落させるものになる可能性がある。一方、カカランマが唄うオヨシの場合、祭事においてオヨシを唄っている間にカカランマ自身に生じる靈感型憑依は第三者には実見できないものであるため、靈感型憑依が生じないオヨシの公演であっても、それが靈感型憑依の観念を人々から脱落させるものになるという問題は生じないと思われる。

謝辞

本稿で紹介した内容は、拙稿〔川上 2016〕を記した際に用いた聞き取り調査による資料、および平成 28 年 3 月 3 日～3 月 5 日、同 11 月 7 日～11 月 10 日に佐良浜で行なった聞き取り調査によるものです。調査にご協力いただいた仲間明典先生、與儀千代美さん、上原敏美さん、長崎国枝さんに感謝申し上げます。なお本稿の文責はすべて筆者にあります。

引用文献

- 伊藤亜人 1996 『アジア読本・韓国』河出書房新社
- 川上新二 2011 『死者と生者の民俗誌—韓国・珍島 巫女の世界—』岩田書院
- 2016 「沖縄・伊良部島佐良浜の宗教職能者—祭司とシャーマンの関係について—」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第 65 輯
- 2017 「二種類のシッキム・クツ—宗教儀礼を保護する際の問題点—」『駒澤大学 文化』第 35 号
- 公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団
- 2014 『国立劇場おきなわステージガイド 華風』11 月号
- 佐々木宏幹 1980 『シャーマニズム—エクスタシーと憑霊の文化—』中央公論社
- 1995 『宗教人類学』講談社
- 佐藤憲昭 2000 「霊媒と予言者の間—新潟市の S・A の事例から—」櫻井徳太郎編著『シャーマニズムとその周辺』第一書房
- 鈴木正崇 2014 「伝承を持続させるものとは何か—比婆荒神神楽の場合—」『国立歴史民俗学博物館研究報告』第

186 集

- 2015 「大元神楽の変容—島根県邑智郡桜江町を中心に—」篠田知和基編『神話・象徴・儀礼Ⅱ』楽瑯書院
- 土佐昌樹 1989 「憑依の現在—韓国珍島における巫俗儀礼の記述と解釈—」『民族学研究』53 巻 4 号
- 安田ひろみ 1994 「珍島の世襲巫—タンゴルの生活と現況—」韓国文化院監修『月刊韓国』16 巻 8 号
- 1997 「韓国の女性—儒教的規範の裏側、ムダンの世界から—」綾部恒雄編『女の民俗誌 1—アジア編—』弘文堂
- 金泰坤 1981 『韓国巫俗研究』集文堂（ソウル）
- 崔吉城 1969 「巫俗의 民俗誌」『韓国綜合民俗調査報告書（全羅南道篇）』文化公報部文化財管理局（ソウル）

（提出日 平成 29 年 1 月 10 日）